

テニスの系統的指導に関わる小学校体育の授業開発

—幼小中の学習のつながり—

三輪佳見¹⁾・宇土昌志²⁾・山本 亮³⁾・黒木敬博³⁾・高橋祥朗⁴⁾
高橋京子⁵⁾・倉掛啓輔⁴⁾・志々目由理江²⁾・日高正博²⁾

Zu dem Inhalt und der Methode des Tennisunterrichts in der Grundschule

Yoshimi MIWA, Masashi UTO, Ryo YAMAMOTO,
Takahiro KUROGI, Yoshirou TAKAHASHI, Kyoko TAKAHASHI,
Keisuke KURAKAKE, Yurie SHISHIME, Masahiro HIDAKA

I. はじめに

テニスなどのラケットを用いたスポーツは、少ない人数で成立し、気軽に行え、幅広い年齢層に親しまれるため「生涯スポーツ」として取り組まれることも多く、平成29年改訂の学習指導要領解説においては小学校体育にも新たに例示された（文部科学省、2017a、p.98）。

ラケットスポーツはネット型ゲームに属するが、参加者はラケットで打球する技能が伴うことで初めてネット型ゲームの競争が成立する。そこで、ラケットスポーツを始める者はこの競争や、打ち返し合う楽しみを味わうことを目的としてラケット操作の技能学習に動機づけられ、指導者もまず対象の当該技能の習得に着目することとなる。この用具を用いて打球する技能について、ガラヒュー（1999、p.63）は、操作運動スキルとして基礎的な運動スキルに位置づけている。そして、基礎的な運動スキルは6～7歳までに熟練ステージへ到達し、7歳頃から始まる移行ステージから11～13歳の応用ステージまで徐々に専門的な運動スキルの習熟へと進む発達モデルを提唱しており、各年代の発達の遅れが何年にもわたると専門的なスポーツスキルの習得が困難になると主張している（ガラヒュー、1999、p.68-73）。これに倣えば、当該技能の習得は「体づくり運動」領域を始めとして小学校体育が担う重要な課題といえる。

ところで、ラケットスポーツはすべての小学校で取り上げられるとはいえないので、中学校の授業で用具に初めて触れる生徒も少なくない。その中学校体育の指導現場からは、テニスの単元において「ゲームができない」という声が聞かれる。これは、ラケットで打球する技能が課題となって打ち返し合いの競争段階まで到達し難いという意味である。気軽に取り組み、用具さえあれば生徒が動機づけられやすく、また、教師の創意工夫があるにも関わらずこのような声が挙がるとなると、それまでの学習レディネスの問題が示唆される。つまり、小学校体育の段階で育成すべきラケットスポーツの技能、及び、その系統的指導の在り方について検討していく必要がある。そこでは、「体づくり運動」領域との関連を踏まえた段階的な「ゲーム」の授業展開が重要になるものと考えられる。

¹⁾ 宮崎大学大学院教育学研究科 ²⁾ 宮崎大学教育学部 ³⁾ 宮崎大学教育学部附属小学校
⁴⁾ 宮崎大学教育学部附属中学校 ⁵⁾ 宮崎大学教育学部附属幼稚園

以上のことから、ラケットスポーツの系統的指導の在り方を究明していく必要があり、そこに小学校体育の担う役割は大きいと考えられる。そこで本研究は、ラケットスポーツにおける系統的指導に関する基礎資料を収集することを目的として、テニスを見据えて中学生の実態調査や幼児の指導観察、そして、小学校低学年・中学年を対象として「体づくり運動」領域との関連を踏まえた授業開発を試みる。このように幼児・児童・生徒の横断的な実態を把握し授業開発の事例を示すことで、各発達段階の運動形態の特徴ならびに指導の要点について概観でき、ひいては幼小中の学習のつながりをもたせた系統的指導の構築に寄与するものと期待できる。

II. ラケットスポーツの指導をめぐる問題

1. ネット型ゲームの指導をめぐる問題

中学校学習指導要領解説保健体育編では、テニスのようなネット型スポーツを「コート上でネットを挟んで相対し、身体や用具を操作してボールを空いている場所に返球し、一定の得点に早く到達することを競い合うゲーム」と定義し、「第1学年及び第2学年ではラリーを続けることを重視」することが求められている（文部科学省、2017b、p.124）。

しかし、生徒たちの多くはボールを打つ技能を獲得しているとはいえず、ラリーができるように、まず打つことを段階的に指導する。ラケットで打つ種目では、どのようにラケットを振るか習得するために素振り、そしてボールの動きを簡易化し、打ちやすいようにトスしてもらったボールを打つ練習へと学習が進められていく。打つことの学習に時間をかけすぎると、限られた授業時間数ではゲームができなくなってしまう。そもそも、部活動に参加している生徒と同じように打てるようになるわけではない。打つ技能の獲得が不十分なままゲームを試みればゲームが成り立たない。デブラーら（Stiehler, G. u. a., 1988, S.19: 唐木監訳、1993, p.6）はネット型のゲームの特性を「打ち返すゲーム（Rückschlagspiele）」にとらえ、「敵が捕れないように打ち返すことがゲームの目標」と述べている。したがって、打つことができ、ようやくゲームの競争が可能になるといえる。

2. ボール操作の指導に関する問題認識

そうはいうものの打つ技能を身に付けることは難しい。金子（2007、p.198）によれば、飛んできたボールを直接打ち返すボレーは、ボールをとらえるのと同時に放り出す動きであり、「中間局面が消滅して、二つの類化形態がじかにつなが合わされる」接合形態であるという。ボールを強く、あるいは遠くへ飛ばそうとすれば、その打つ動きは外形的には投げる動きと類似する。そのため、とくにラケットで打つような種目では、まずラケットをしっかり振れるように素振り練習がしばしば取り入れられる。しかし、飛んでくるボールをとらえられなければ、単に空振りするだけになってしまう。つまり、打つためには捕れるという動感が不可欠なのである。

マイネル（1981、p.309）によれば、捕ることは大体満2歳になる少し前に発生するという。投げることは、物をつかめるようになり、さらに立って歩くためのバランス保持から腕が解放されて自由になれば放り出すという動きができる。それに対して飛んでくるボールを捕ることは、「ボールが行くから捕ってね」という言語による要請を理解できなければ発生しないのであり、投げることに比べて遅れて出現するのである。しかも、捕る構えをしてみると、ひじを曲げたまま両腕を平行に差し出すだけで、そこにフワッとのおるようにボールが来ないと捕

れないのであり、少しでもずれるとボールは落ちてしまう。

このように発生する捕る動きから打つ動きへと発展させていくためには、どのような形状のボール（大きさ、重さ、硬さ、弾力性など）を、どういう動きになるように投げてやり、捕る側の条件として、手か用具なのか、受け止める面はどれくらい広いのかなど、様々な条件を子どもに適合するように組み合わせながら系統的段階的に導いていくことが重要である。

Ⅲ. 学習のつながりを目指した幼小連携の指導に関する事例的考察

1. 中学校第1学年の生徒の実態

(1) 中学校第1学年に求められる技能

第1学年及び第2学年の学習として、「ネット型では、ボールや用具の操作と定位置に戻るなどの動きによって空いた場所をめぐる攻防をすること」（文部科学省、2017b、p.122）が技能の内容であり、「基本となる用具の握り方（グリップ）、ボールを受ける前の身体や用具の構え方（準備姿勢）から、ボールをとらえる位置への移動の仕方（ステップ）、腕や用具の振り方（テイクバックやスイング）、ボールのとらえ方（インパクト）、ボールをとらえた後の身体や用具の操作（フォロースルー）などで、身体や用具を操作してボールを味方につないだり、相手側のコートに打ち返したりする」という「ボールや用具の操作」を身に付けることが求められている（文部科学省、2017b、p.124）。

テニス部に所属している生徒を除けば、授業で初めてテニスをするというケースがほとんどである。こうした生徒を対象として、少ない時間数の授業だけで上記のような技能を獲得させることは難しい。したがって、幼稚園から小学校において、中学校入学までにどのような内容を指導し、学習レディネスを育てるべきか明らかにする必要がある。そこで、まず中学1年生はどれくらいラケットで打てるのか実態を把握することにした。

(2) 実践結果と考察

① ねらった場所にサービスを打つ運動課題

第1学年2クラスの生徒（男子32名、女子38名）を対象として、ベースラインから対角のサービスラインをねらってサービスを打つという課題を一人10本実施した。ラケットは短いものを使用した（写真1）。教師が「一番確実に入る打ち方で打つようにしてください」と説明をした後、テニス部の生徒が示範した。サービスの結果と打ち方は表1と表2のとおりである。



写真1：短いラケット

サービスの成功率については、おおよそ2本に1本はサービスをねらったところに打つことができた。また、空振りする生徒はほとんど見られなかったことから、自分でボールを上にあげて打つ技能は身に付いている。しかし、テニス部の生徒が20名含まれていたこと、そして短いラケットというボールを当てやすい条件が関係していると考えられる。

表1：サービスの結果

サービスが入った	46%
ネットを越えてフォルト	21%
ネットを越えずにフォルト	31%
空振り	2%

表2：サービスの打ち方

上から打つ (写真2)	50%
下または横から打つ (写真3)	34%
上から、下から両方 (途中で打ち方を変えた)	16%

②ワンバウンドしたボールを的に向かって打つ運動課題

次に上記と異なる2クラスの生徒(男子40名、女子38名)を対象として、ベースラインからサービスライン上にあるコーンを狙って打つ課題を行った(図1)。自分でワンバウンドさせたボールを①の実践で使用したラケットを使い一人10本打った。打ち出されたボールの結果は表3のとおりである。なお、13名のテニス部員が含まれている。

約30%の生徒が的から1m以内のところに打っており、約60%がネットを越えるように打てた。この実践でも、空振りをする生徒はほとんど見られず、上にあげたボールやバウンドさせたボールをラケットに当てる技能はおおかた身に付いていることが分かった。しかも、導入動作としてテイクバックを行い、大きな動きで振り打つことができる生徒もいた(写真4)。こうした結果になった要因として、本課題の実践前にソフトボールの授業があり、手にはめるラケットでボールを打つという類似の動きの感覚を味わえる練習を行っていたことが挙げられる。



写真2：上から打つ



写真3：下から打つ

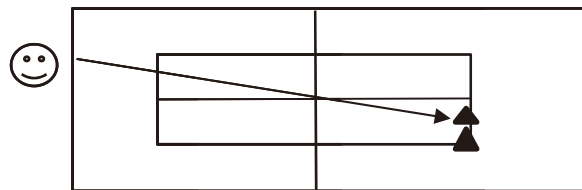


図1：的に向かって打つ

表3：打ったボールの結果

的に当たった	3%
的から1m以内	26%
的から2m以内	15%
ネットを越えた	17%
ネットを越えない	33%
空振り	6%



写真4：テイクバック

2. 幼児の指導事例

(1) 小学校入学前に身に付けさせたい技能

マイネル(1981,p.314)によれば、小学校入学前には「走る」「跳ぶ」「投げる」「捕る」といったスポーツ運動の基本形態とその組合せを一定の習熟度で自分のものにするという。しかし、「空間・時間・仲間」という「三間」の不足が問題とされる現代では、運動遊びへのかかわり方や経験には個人差が見られ、技能についても個人差が大きい。

中学校でのラケットを用いる運動につながる、小学校低学年での「体づくり運動 多様な動きをつくる運動遊び」の中のボールを用いた遊びへの取組を考えると、幼児期には、いろいろ

なボール遊びを経験する中で、ボールが飛んでくることに慣れ、怖がらずに飛んでくるボールに触れられるようにすることが求められる。

(2) 実践結果と考察

① ボールをキャッチする動き

年長児を対象として、教師が投げたスポンジボール（直径9cm、重さ30g）を持っている網で捕球するという運動課題を実施した。教師が手本を見せ、動きの説明をして実施したが、網の持ち方や捕り方などは、特に指示しなかった。教師は、3mほど離れた場所から幼児が捕球しやすいところにボールを投げるようにした。網を構えているだけの幼児や自分の前後に飛んでくるボールに対応できない幼児が多かったが、自分なりの捕り方で捕球しようとすることを楽しみ、捕球できると喜んでいた。中には、虫捕りのように網を振って、捕球しようとする幼児（写真5）や、横にそれたボールを、足を動かして（踏み込んで）捕球することのできる幼児（写真6）の姿も見られた。



写真5：網を振って捕球



写真6：足を動かして捕球

② ボールを手のひらで打つ動き

上記のスポンジボールを、自分で床に落とし、弾んで上がったところを手のひらで壁に向かって打つよう指示した。しかし、ボールを床に真っ直ぐ落として弾ませられず、上がってくる場所の変化が大きくなってしまい、ボールを手に当てることのできない幼児が多かった。ボールの床への落とし方について、分かりやすい説明が必要であると感じた。また、ボールを落として打つ、つまり投げて打つという動きを組み合わせることにも難しさを感じているようだった。

そこで2回目は、ボールの弾ませ方、打ち方を段階的、具体的に伝えた。はじめに、ボールを真っ直ぐ床に落として弾ませて両手で捕球する（写真7）。次に、床で弾ませたボールを片手で床に打つ（写真8）。最後に、床で弾ませたボールを片手（手のひら）で壁に向かって打つ（写真9）。



写真7：両手で捕球



写真8：片手で床に打つ

段階的に取り組んだことで、一つ一つの動きができた喜びや達成感があり、意欲的に取り組む姿が見られた。しかし、ボールを弾ませて打つという動きの組合せには難しさを感じている幼児が多かった。



写真9：片手で壁に打つ

③ まとめ

好きな遊びの中で、よくボールに触れて遊んでいる幼児や虫捕り等をしている幼児は、動いたり飛んできたりする対象（ボールや虫等）に対して怖がらず、積極的にかかわろうとしてい

た。ボールを打つ動きでも同様に、自らボールを弾ませて捕ることに何度も挑戦し、手に当てることを楽しんでた。逆に、そのような遊びの経験が少ない幼児は、網を構えているだけで、ボールが飛んでくる方向に網や身体を移動させることは難しく、ボールを弾ませて手で打つことも困難であった。

3. 小学校低学年における指導事例

(1) 小学校低学年で身に付けておきたい技能と指導計画

前述の幼児の実態から、ボールを「突く(弾ませる)」「たたく」「打つ」動きや、ボールが弾む位置に「移動する」動き、ボールを「捕る」動きを段階的に高めることが求められる。しかし、これらの技能を向上させるには、低学年のゲーム領域(ボールゲーム)で実施する時間だけでは難しいので、カリキュラム・マネジメントの観点から「体づくりの運動遊び」と関連させて指導することにした。小学校学習指導要領解説体育編(文部科学省、2017a、p.38)には、「基本的な体の動きを幅広く培っておくことが重要であり、他の領域において扱いにくい様々な動きを取り上げること」と述べられている。

そこで、小学校第2学年児童(男子18名、女子16名)を対象とした「体づくりの運動遊び」の単元において、ボールを力強く打ったり捕ったりする動きを4時間指導することにした。これらの運動の学習に段階的に取り組むだけでなく、中学年以降の「用具を使って相手コートにボールを返球する(打ち付ける)」ゲームにつながる動きを身に付けられるように、「用具でボールを打つ」運動遊びを計画した。用具は、直接手に装着できるラケット(写真16参照)を使用し、手のひらでボールに触れる動きから、手のひら感覚でボールを打つ動きを段階的に高めることができるようにした。

(2) 指導の実践結果と考察

①第1時

ボールを操作して運動する(遊ぶ)機会が少ないという実態を考慮し、まずは大きさや跳ね方の異なるボール(直径7cm、10cmのゴムボール、直径16cmのハンドボール1号球、直径22cmのゴムボール)を使って「ボールが弾む位置に動く」「ボールを捕る」「ボールを突く(弾ませる)」という運動課題を実施し、指導前の児童の技能を把握した。

ボールを突いて大きく弾ませるためには、手首のスナップを使うことが必要である。そこで、一人で突く運動課題から、仲間と交替しながらボールを突き続ける運動課題へと段階的に挑戦させた。はじめは突く力が弱く、ボールを弾ませられないことが多かった(写真10)。ボールの大きさを変え、仲間につなげさせることで、手首を使って強く突く動きが見られた(写真11)。しかし、ボールが弾む位置に動く、あるいはボールを強く突く技能は、運動経験や体格の違いによる個人差が大きかった。



写真10：ボールを弾ませられない児童 写真11：仲間につなげる児童

②第2時

第2時では、壁に向けて「ボールを投げる・捕る」という運動課題で、「ボールが弾む位置

に動く」ことも同時に行った。片手でショルダースロー（写真12）やサイドスローができる児童は少数で、多くは両手によるオーバーヘッドスロー（写真13）やアンダースローであった。そのため、勢いよく投げることができる児童は少なく、壁から跳ね返ってきたボールをワンバウンドで捕る（捕らせる）ために、壁から2～3mのところから投げる児童が多かった。

また、足を前後に広げ、体重を移動させながら投げている児童は少なく、両足をそろえたままで投げている児童が多かった。このような投げ方は、次時以降のボールを打つ動き（体重移動、腕の振り、手首のスナップ等）にもつながると考え指導計画を修正した。

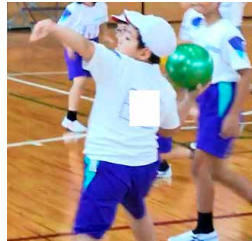


写真12：ショルダースロー



写真13：オーバーヘッドスロー

③第3時

「ボールを打つ」ことの予備運動課題として、ガムテープを貼って重さを加えた風船を「たたく」運動遊びを行った。風船を遠くに飛ばしては追いかけてまた打つという運動をリレー形式で行わせることで、ゆっくりと落下する風船をめがけて腕を振り、力強くたたく姿が見られた（写真14）。



写真14：風船打ち

「ボールを打つ」課題は、手のひらにラケットをはめて壁に向けて打ったボールを自分かペアの仲間が捕る形式で行った。教師が腕を後方から勢いよく振ることをポイントとして示すと、前時において両手でボールを投げている児童が、腕を振って打つようになった（写真15）一方で、腕を横や下から振って打つような動きをする児童はわずかであった（写真16）。このことは写真14の児童の動きを取り上げて指導したことも要因であると考えられる。また、風船の時と同様にボールを上に向けてから打とうとすることで、タイミングよく腕を振ることが難しい児童も多く見られた。



写真15：腕を振って打つ



写真16：腕を横から振って打つ

④第4時

前時と同様に、まずは壁に向けてボールを打つ運動遊びを行った。ボールを強く打つことを意識できるように、打ったボールは自分よりも後ろに立つ仲間に捕らせる形式を採用したところ、全身を使って大きく腕を振って打とうとする児童が増えた（写真17）。



写真17：全身を使って打つ



写真18：身体をひねって打つ

また、ボールを打ち出す目標を壁からコーンに変え、3m、4m、5mの距離に置いて打つ課題を行った。強く

打つことを促すと、これまでボールを押し出すように打っていた児童も、腕を後ろに引き、身体のひねりを使って打つ動きが見られた（写真18）。さらに、前時では腕を上から振っていた児童のなかに、仲間の打ち方を基に腕を横から振って打つようになった児童も出てきた（写真19）。

⑤まとめ

以上のような実践をとおして、腕の振り方、力加減、身体のひねり、手首の向き等、「ボールを打つ」ための身体の動かし方について、大切なポイントを共通理解して学習を進めると、半数程の児童が「できる」喜びを味わえた。一方、足の開きや体重移動ができない児童やボールを上手くとらえられないままの児童もいた（写真20）。



写真19：横から振って打つ



写真20：ボールをとらえられない

4. 小学校中学年における指導事例

(1) 小学校中学年で身に付けておきたい技能と指導計画

小学校学習指導要領解説体育編（文部科学省、2017a、p.142）には、「自陣のコート（中央付近）から相手コートに向けてサービスを打ち入れること」「ボールの方向に体を向けて、その方向に素早く移動すること」「片手、両手もしくは用具を使って、相手コートにボールを打ち返すこと」が、ネット型のボール運動について高学年の技能の内容として例示されている。中学校において相手が捕りにくいボールを打ち返すネット型ゲームを楽しめるようになるためには、ここに挙げられた技能を小学校段階で獲得しておく必要がある。

しかしながら、児童の実態として、用具で打つネット型のボール運動の経験は極めて少ない。そのような状態で高学年で初めて実施するのでは、運動の行い方を知ることはもちろんのこと、限られた時間枠で中学校の学習のレディネスを形成することは困難である。そのため、中学年における易しいゲームをとおして、用具を使って行う基本的なボール操作やボールを操作できる位置に移動する動きを身に付けさせる必要があると考えた。

そこで、第3学年児童（男子16名、女子16名）を対象に、ネット型のボール運動につながるゲームとして、「仲間同士でラケットを使ってボールを返球し合うゲーム」を設定した。スカッシュを基に用具操作や規則を易しくした「テニラケッシュ」（第3筆者山本による命名）というゲーム教材を考え、9時間で指導するように構成した（表4）。

表4：テニラケッシュ(ネット型ゲーム)の単元指導計画

主な学習活動及び学習内容	
1 オリエンテーションをする。(1時間)	
○ 試しのゲーム ※ 単元のメインゲームよりも易しい規則で行う。	
【規則】 <ul style="list-style-type: none"> ・ 制限時間 6分（前後半3分） ・ ボールを壁の枠内に打ち返せたら1点 ・ キャッチあり 等 	

<p>2 ゲームをとおして、返球する動きを高める。(5時間)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 手にはめるラケットを使った打ち方(1時間) ○ レシーブしやすい位置に移動する動き(1時間) ○ ラリーを続けるための工夫(3時間) 	<p>【規則の変更】 第4時…ツーバウンド以内でレシーブ 第5時…キャッチなし</p>
<p>3 チームで作戦を選び、ゲームをする。(2時間)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 相手が返球しにくくなる打ち方(1時間) ○ 相手のボールをうまく返球するための連携(1時間) 	<p>【規則の変更】 第7時…相手が返球できなかった場合に得点</p>
<p>4 作戦を生かして、「テナラケッシュカップ」を楽しむ。(1時間)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ チームの作戦 	

(2) 指導の実践結果と考察

本単元は、「用具でボールを打つ」動きの難しさを緩和するために、直接手にラケットを装着し、正面の壁に交替しながらボールを打ち付けるようにした。しかし、打つ方向に対するラケットの面や身体の向き等がうまくつかめていないために、ボールが前に飛ばない(写真21)、ボールが上に飛んでしまう(写真22)、打ちやすい場所へ移動できない(写真23)など多くの問題が発生し、打ちたいところのように打てず、仲間とラリーを続けることができなかった。



写真21：ボールが前に飛ばない

そこで、単元をとおして、授業始めに一人もしくは二人で手にラケットをはめて壁打ちを行う時間を設定し、基本的な打つ動きの習得を図った。この取り組みにより、打ち出したい方向へのラケット面の向きや打つ強さの力加減等について、自分なりに動きのコツをつかみ、



写真22：ボールが上に行く



写真23：うまく移動できない

少しずつ思うように打てるようになった。また、跳ね返ってくるボールに向かって移動して打つことは難しいため、跳ね返ってきたボールを捕球してもよいことにした。この簡易化により、ラリーが続く面白さを味わう場面を増やすことができた(写真24)。



写真24：①児童Aが打ち、②児童Bが捕って、③そのボールをバウンドさせて打つ

しかし、捕球が容認されているため、どのようなボールでも捕ってしまうようになり、プレイが途切れてしまう事態が起こった。そこで、自分にとって返球することが難しいボールに対し、虫取り網に入れたボールをゆっくりと動かしながら跳ね返りを再現し、そのボールを操作

しやすい位置に移動する動きについて考えさせたり（写真25）、直接児童の身体を幫助して動き方を指導したりした（写真26）。この指導を行うと、跳ね返ってきたボールをできるだけ捕球せずに直接打ち返そうとすることが徐々に増えた。さらに、自分のねらった高さに打ったり（写真27）、フォアハンドで打てるように移動して構えたり（写真28）する児童も見られるようになり、その結果、友だちと交替しながら壁に打つこともでき始めた（写真29）。



写真25：教具を用いた指導



写真26：直接幫助による指導



写真27：ねらった高さに打つ

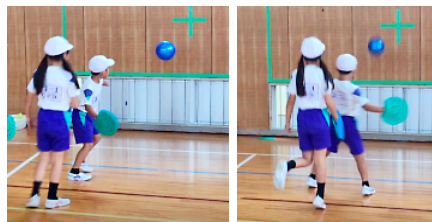


写真28：移動してフォアハンドで打つ

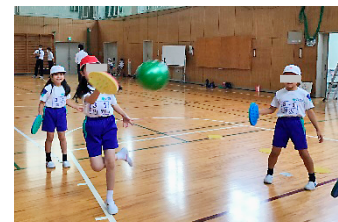


写真29：交替しながら打つ

今回の実践では、用具を使ってボールを打つということをあまりしたことがない小学校中学年児童を対象として、実施条件を簡易化したゲームを指導した。低学年で用いた手にはめるラケットとよく弾む軽量のボールを使った。低学年でも扱える用具を使用したことで、壁打ちではあるが、ネット型ゲームの競争課題である「打ち合い」の基礎技能を育てることができた。ただし、中学校のテニス学習のレディネスを形成するためには、手から離れた場所で、打ちやすい位置に移動して打つ学習へと発展させる必要がある。

IV. 結語

本研究は、テニスの系統的指導について、幼小中の学習のつながりを意識しつつ、小学校体育の授業を開発しようとした。

まず、ラケットスポーツの指導をめぐる問題が整理され、ゲームを楽しむためには「打つ」技能の獲得が必要であること、及び、その「打つ」技能は「捕る」技能から発展し、「投げる」動きと外形的に類似していることなどが確認された。

次に、中学校入学までにどのような技能を習得していればよいかを明らかにするため、中学校1年生を対象に打動作に関わる実態を把握しようとした。その結果、短いラケットを用いたサービスの成功率が約50%であることや、ワンバウンドしたボールをねらって打つ課題では約30%の生徒が1m以内に打っていることが明らかにされた。以上のことから、打具を短くするなどの工夫をすれば、ある程度「打つ」ことはできるものと考えられた。ただし、これらは自身で供給したボールを打つことが課題になっており、移動の必要のない中での打動作であった。実際のテニスのゲームでは、相手はラリーを分断するために打ちにくいところにボールを供給してくるので、移動運動を経ての打動作を習得することが目指されなければならない。

そのうえで、幼児、小学校低学年、中学年を対象にした指導事例を報告し、それらが中学校

での学習につながることを企図して体育授業を開発しようとした。

まず幼児を対象にした事例では、小学校低学年での「体づくり運動 多様な動きをつくる運動遊び」につながることを企図して、網を使ってボールをキャッチする運動やボールを手のひらで打つ動きを体験させた。段階的な指導が必要であることが改めて示されたとともに、自身でボールを弾ませて打つという動きの組合せに困難を感じる幼児の存在が確認された。

次に、ゲーム領域のみで打動作を習得するのは困難であるので、「体づくりの運動遊び」の内容と関連させながら、打動作につながる動きを身に付けようとした。2年生を対象にした4時間の活動は、ボールや打具や活動形態を工夫しながら、教師の協働的な学習のための教授行動に支えられ、「ボールを打つ」ための身体操作のポイントを理解し、できる喜びを味わわせることができたと考えられた。このことから、ゲームで求められる動きを「体づくり運動（遊び）」の内容と関連させようとするカリキュラム・マネジメントの発想の有効性が確認された。

さらに、中学年（3年生）を対象にしたゲーム領域の指導事例を報告した。具体的には「仲間同士でラケットを使ってボールを返球し合うゲーム（テニラケッシュ）」を教材とした9時間の授業実践である。打具を用いてボールを打つ経験のない児童が多く認められたクラスであったため、ラリーを分断させることが課題にならない親和的ゲームから学習をスタートさせたことで、打具を使った「打ち合い」の基礎技能に児童の意識を集中させることができ、教師の指導内容も焦点化されたことで、技能の育成につながった。

以上のように、テニスの系統的指導に関わる小学校体育の授業開発を事例的に述べてきたが、体づくり運動との関連を押さえたゲーム領域につながるカリキュラム・マネジメントの重要性と子どもの実態に応じたゲーム教材の開発の重要性が改めて示された。なかでも、ラリーの分断が課題にならない親和的ゲームの可能性が示唆されたことは大きな成果である。

今後は、高学年児童及び中学生を対象にしたテニスの授業開発が課題である。具体的には、打具をはじめとする用具やルール工夫などを通して、ラリーを分断・継続することが課題になるようなゲーム教材を開発することなどがあげられる。

文献

- 1) ガラヒュー：杉原隆監訳（1999）幼少年期の体育—発達の視点からのアプローチ—、大修館書店
- 2) 金子明友（2007）身体知の構造、明和出版
- 3) マイネル：金子明友訳（1981）スポーツ運動学、大修館書店
- 4) 文部科学省（2017a）小学校学習指導要領解説体育編、東洋館出版
- 5) 文部科学省（2017b）中学校学習指導要領解説保健体育編、東山書房
- 6) Stiehler,G.u.a.（1988）Sportspiele.Sportverlag（唐木國彦監訳、ボールゲーム指導事典、大修館書店、1993）